

主の天使が命じたとおり

奨励	韓 守信〔はん・すしん〕
奨励者紹介	日本キリスト教団長岡京教会牧師

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリヤのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリヤを迎え入れなさい。マリヤの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリヤは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリヤと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

（マタイによる福音書 1章18―25節）

クリスマスを迎えるにあたり

皆さん、こんにちは。そしてメリークリスマス。今年度からキリスト教文化センターのチャペル・アワーで、奉仕をさせていただいております、日本キリスト教団長岡京教会からきました韓（はん）と申します。金曜ランチタイム・チャペル・アワーで目にかかっている学生さんたちもいらっしゃると思いますが、今日、初めての方もいらっしゃるかもしれません。教会暦では11月27日にアドベント（待降節）という時期を迎えまして、クリスマスに備える日々を送っています。教会でも3本目のクランツの蠟燭に火が灯りました。こちらでも蠟燭に火が灯っておりまして、間もなくクリスマスが来るのだなと実感しながら日々を歩んでいます。教会とは異なる場所、こういう機会はとても有意義なことだと思います。大切に礼拝の時を守りたいと思います。礼拝を終えて皆さんと共に、神様の力によって押し出され、それぞれの持ち場へと帰っていくことができたらと願っております。

先ほど、越川先生がお祈りされましたとおり、3月11日の東日本大震災を受けて、多くの人びとが苦しみにあることを思うとき、また、世界各地で災害が起こったことを思うとき、アドベントの日々を送りながら、とても考えさせられました。被災者の方々や苦しみのなかにある方々、日本だけではなく、世界のすべての方々のために、神様は大切な独り子をこの地球に送ってくださったのだなという真実を思ったとき、自分のこれまでの歩みが根本から覆されるような気分になり、辛くなりました。自分自身は、これまでイエス様のご降誕や、聖書のメッセージが、あたかも自分だけのためにあったかのように錯覚していることに気づかれ、深く反省しました。そして、ここで止まるのではなく、与えられたメッセージに基づいて自分の歩み、イエス様の言葉を用いるならば「自分の十字架」を背負っていく必要があると思いました。

今年も、私たちはクリスマスを迎えようとしています。こうして礼拝をささげる私たちにとっては、12月25日がクリスマスなのですが、その日だけがクリスマスではないということも、同時に私は思うわけです。1年間、365日、死ぬまで神様が私たちの罪の贖いのためにイエス様を、この世に遣わせてくださったということ覚え続けている限り、私たちは毎日、クリスマスの感謝、喜び、そのなかで感じる責任を担いながら生きていくことができます。しかし、実際、外に出かけますと、そういう光景、思いを感じにくい現実があるわけです。テレビを見ても「もうびとこぞりて」の歌を使ってカラオケの宣伝をしています。街中にイルミネーションが溢れています。しかし、12月25日を過ぎると、街からはクリスマスの雰囲気さがさって消えて、門松が飾られ、正月の風景に変わっていきます。このような現実のなかで、私たちはクリスマスをどのように迎え、どのように生きていくのかということを考えていく必要があるのではないだろうかと改めて思わされます。

クリスマスの迎え方、クリスマスに基づいた生き方を、今日の聖書の箇所が登場するイエス様の父といわれるヨセフは私たちに示していると思います。私は皆さんにメッセージをお伝えする資格は何らありません。神様の思われていることを少しでも取り次ぐことができたという願いをもってにしかすぎません。私が聖書を通して感じたこと、気づかされたことを、この場において証（あかし）したいと思っています。

おはようございます。文化情報学部 鄭躍軍です。私はクリスチャンですが、このような場でお話をするのは大変恐縮です。今日は、信仰をもつことの意義に対する考え方を中心に、皆さんと分かち合う時間を持ちたいと思っております。

御心どおりに実現する神様の御業

クリスマスを迎えるにあたり、大切なことは何か。私にとって特に重要だと思われる二つのことを皆さんに証としてお伝えします。一つ目の証は何か。神様の御業は、ご自身の御心、ご計画通りに実現するということです。

マタイによる福音書1章18節の御言葉には、このように書かれています。「母マリヤはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」。20―22節「このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリヤを迎え入れなさい。マリヤの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリヤは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。』このすべてのことが起こったのは主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」。私たちが神様の御業を理解するうえで大切なのは、神様が一体全体、どういう方なのかということを知ることだと思うのです。聖書、特に旧約聖書の創世記では、「神様は私たちをつくってくださった方である」と私たちに伝えています。土の塊にしかすぎない私たちに、神様はご自身の命の息を吹き入れてくださったわけです。ある神学者は「神の愛は愛の対象を探さない。愛の対象をつくりだす」と言っています。人間と全く異なる神様の姿を私たちは受け止める必要があると思います。ヨハネの黙示録に神様のことを表現する有名な言葉がありますが、このように書かれています。「私はアルファであり、オメガである。初めてあり、終わりである」。人間とは全く異なるお方であるということ、このヨハネの黙示録20章6節は語っています。神様は歴史を支配し、初めから終わりまで統治され、導いておられる。人間の基準や物差しでは、受け入れることのできないことかもしれません。科学や人間の常識や理性では理解できないことかもしれませんが、神様が人間とは本質的に、根本的に異なる御心とご計画に基づいて、ご自身の御業を成しておられることを私たちは知り、その御業のなかにイエス様のご降誕があったということを、謙虚に受けとめる必要があると思います。

今日の聖書の箇所が登場するヨセフの妻のマリヤですが、聖霊によって子どもを身ごもります。人間の常識をはるかに越えた、ありえないことだと思います。まさしく開いた口がふさがらないことだと思いますが、でも確かに起こった事実なのです。「主の預言者を通して言われていたことが実現するためであった」と聖書に書かれています。神様によって定められているご計画、御心が実現しました。それがクリスマスであるといえます。

ヨセフにとってこの知らせは、本当に辛いことであったと思います。ヨセフのつれあいとなるマリヤにとっても、受けとめ難い、とても辛いことであったでしょう。しかし、イエス様のご降誕は神様の御業であり、それは神様の御心とご計画に基づいて実現したことであると聖書は語っていますから、そのことをヨセフとマリヤもしっかりと受け止めて歩んでいったのだと思います。

神様の御業の器である私たち

二つ目の証は、神様の御業が実現する過程は、どうなっているのかということです。神様は、私たちと別の場所で、勝手に何かをなさるものではありません。神様は、その御業を実現されるうえで、誰かを用いられます。御業の器を立てて、その存在を通して働かれます。このことを聖書の箇所から読み取ることができます。別の言い方をするならば、神様の御業が実現するためには神様の御業があることを信じ、受け入れて、参与していく者がいないといけないということです。24―25節の御言葉にこのように書かれています。「ヨセフは眠りから覚めると主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリヤと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた」。

旧約聖書の申命記23章23―37節によると、婚約中の女性が婚約者以外の男性と性的な関係を結ぶと二人とも石で打ち殺されるという規定が書かれています。ヨセフにとって、ありえないこと、自分と関係ないことが起こったということが、今日の聖書の箇所を通して確認できます。19節を見ると、ヨセフが「正しい人」と描かれていますが、おそらくこれは律法をよく学び、律法をよく信じていたからなのでしょう。身ごもっている女性と結婚することは自分の命すら危ぶむ出来事であるとヨセフは考えたと思いますが、最終的にそのことを受け入れたわけです。ひそかに縁を切ることもできたのに、マリヤのことを表沙汰にしませんでした。最終的にヨセフがどうしたのか。そこを私たちは見ていく必要があると思います。ヨセフは、神様がなさったことをそのまま謙虚に受け入れました。自己防衛せず、むしろ、不可で理解しがたく、逃げ出したいけれども、私は神様がなさることについて、自分自身を献げていこうとしました。マリヤを迎え入れることはヨセフにとっては不安で、痛みを伴う苦しみでした。しかし、ヨセフは神様との関係に基づいて、神様の御業を信じるが故に、マリヤを受け入れる決断をしたのです。ヨセフは天使から言われたこと、天使を通して伝えられたことは神様の御業であるから、御心に真剣に向き合おうとして、自分自身のすべてを神様に委ね、明け渡しました。今日の聖書の箇所を通して、ヨセフのような生き方を私たちもしていくべきではないだろうか。そのことを強く感じることができました。自分の理解や常識を越えたところに神様の御心があったとしても、神様との関係のなかで、自分自身を委ね、明け渡していくことが、私にとって、また人間にとって大切ではないだろうかということを強く思うわけです。神様の御心は私たちの服従と献身なしには実現しないということを気づかされたわけですし、神様は皆さんを通して、神の御業をなさろうとしています。自分の思いや願いを叶えるために神様がおられるのではありません。神様の御働きのために自分自身がいるということを謙虚に思い、そのために日々を誠実に歩んでいく私たち一人ひとりでありたいと思います。神様の御業を信じ、そこにつきしたがいい、自らを委ね、明け渡していく私自身でありたいということが、皆さんに申しあげる二つ目の証です。

もう一人のヨセフとして

今日、私たちはマタイによる福音書第1章18節から25節までを通して、とりわけヨセフの姿を通し、私たちが、クリスマスはどう迎えるべきか、クリスマスに基づいて、どう生きていくべきかを分かち合いました。そのことに基づいて私は皆さんに証をしました。神様の御業は、必ず実現します。神様の御心、そしてご計画通りに実現します。そのことを覚えつつ、クリスマスを迎える私でありたいですし、皆さんであっていただきたいと願っています。

そうすることによって私たちは本当の意味での豊かなクリスマスを迎えることができると思うのです。聖書に示されているヨセフの姿を自分にも適用させながら、生かされていく私たちでありたいと心から願い祈っております。

2011年12月21日 京田辺水曜チャペル・アワー「クリスマス礼拝奨励」記録

※掲載しております現在発行中チャペル・アワー奨励集（冊子）第283号の奨励タイトルの表記に誤りがございました。

（誤）主に天使が命じたとおり

正しくはHPの掲載表記と同じく、

「主の天使が命じたとおり」となります。

深くお詫び申し上げますとともに訂正させていただきます。